マーク　ランドンジョーンズ

私はよく知っている場所に車を停めた。そこには誰も居なかった。私は車を降りて、近道はないかと探した。右側を見たとき、遠いところに黒い線が見えた。今日は行かない道だ。
私は濡れてもいいようなアウトドアシューズを履いていなかったが、草原を横切ろうかと考えた。草は先ほどの雨で濡れていた。私は今までこういったこと（革靴で濡れた草原を横切るようなこと）を何度も何度もやっていた。
私はガードレールにもたれて、目の前に広がる景色を眺めた。海の黒い影の部分と空の灰色の部分がひとつに溶け合っている。湿気を含んだ冷たい風が頬に触れる。よく知っている海の匂いだ。全てを受け入れてくれるようで、それでいて突き放すような。
遠いところには、新しいエリアのホテル、レストラン、アパートの光が見える。あそこは昔は港と金鉱だったのに。100 年以上も前にあそこで働いていた男たちの上に、あの新しいエリアはつくられたのかもしれない。あそこで私は育ったのだ。楽しかった子供時代。そして学生時代。私が何年も前に出て行ったところ。
あそこは私の故郷なのか？私を呼んでいるのか？私はそこに留まるべきなのか？
私は濡れた靴を感じながら車のエンジンをかけ、動き出した。私にはまだいろいろみることがある。あそこに戻るのはまた次の機会に。

（この文章は、マークのお母さんが亡くなったあと、故郷のウェールズに灰を撒きに行ったときのことを書いたものだそうです。）